

<概要>

平成8年度（1996年度）に、法律に基づき報告されたトラブルは14件で、いずれのトラブルも、[原子力発電所](#)の周辺環境への[放射能](#)の影響はなかった。

<更新年月>

1999年03月 （本データは原則として更新対象外とします。）

<本文>

平成8年度（1996年度）に電気事業法及び[原子炉等規制法](#)に基づき、電気事業者から通商産業大臣（現経済産業大臣）に報告されたトラブルは、14件であった。14件の内訳は、運転中（試運転中及び調整運転中を含む）に自動停止したもの1件、手動停止したもの11件、原子炉停止中に発見されたもの2件となっている。なお、いずれの事象についても、原子力発電所の周辺環境への放射能の影響はなかった。

これら法律対象として報告されたトラブルの概要を [表 1-1](#) および [表 1-2](#) に示す。表中の第4欄の「尺度」とは「[国際原子力事象評価尺度（INES）](#)」のことで、難解な原子力発電所の事象を専門家も一般の人々も共通して理解できるように、国際原子力機関（[IAEA](#)）と経済協力開発機関（[OECD/NEA](#)）によって策定された尺度である。

この評価尺度は、

- (1) [放射性物質](#)の発電所外への影響、
- (2) 放射性物質の発電所内への影響、
- (3) 発電所の安全確保の機能の劣化、

の3つを基準にして、レベル0から7までに分けられている。通商産業省（現経済産業省）は、1992年8月からこの国際評価尺度を採用している。

日本でのトラブルは、ほとんどがレベル0になるので、これを

- ・レベル0+（プラス）：安全に影響を与え得る事象、
- ・レベル0-（マイナス）：安全に影響を与えない事象

に細分化している。

<関連タイトル>

[日本の原子力発電所における事故・故障・トラブルの推移（2005年度まで）（02-07-01-01）](#)

[日本におけるBWR原子力発電所の主要な事故・故障・トラブル（2005年度まで）（02-07-01-02）](#)

[日本におけるPWR原子力発電所の主要な事故・故障・トラブル（2005年度まで）（02-07-01-03）](#)

[原子力施設の故障・トラブル・事故の国際評価尺度（11-01-04-01）](#)

[平成8年度試験研究炉における事故・故障（12-03-01-17）](#)

[平成7年度～平成9年度放射性同位元素等取扱施設における事故・故障（12-06-01-16）](#)

<参考文献>

(1) 原子力安全委員会（編）：原子力安全白書（平成9年版）、p.253-255, p.315-316（1998年10月）

表1－1 1996年度原子力発電所におけるトラブルの概要(法律対象)(1/2)

発生年月日	発電所名	概 要	尺 度
96. 4. 24	東北電力(株) 女川発電所1号機	定格出力にて運転中、原子炉格納容器内の圧力が上昇していることが確認されたため、原子炉を手動停止した。 原因は、主蒸気隔離弁パイロット弁のポペットシールが製造段階での融合不足による欠陥が存在した状態で装着されていたことで制御用窒素の圧力により欠損し、窒素が漏えいしたため。	0－
96. 5. 14	北陸電力(株) 志賀発電所1号機	定格出力にて運転中、原子炉冷却材再循環ポンプ(B)の軸封部に機能低下が認められたため、原子炉を手動停止した。 原因は、微細な異物が軸封部に混入したためシール面が摩耗し、その摩耗粉が減圧装置の内面に付着したため。	0－
96. 5. 21	四国電力(株) 伊方発電所2号機	定期検査中、蒸気発生器伝熱管の渦電流探傷検査の結果、高温側の管板拡管部において有意な指示を発見。	0－
96. 8. 1	日本原子力発電(株) 敦賀発電所第1号	定格出力にて運転中、原子炉冷却再循環ポンプ(C)の軸封部に機能低下が認められたことから、当該軸封部を取り替えるため、原子炉を手動停止した。	0－
96. 8. 10	日本原子力発電(株) 東海第2発電所	定格出力にて運転中、「タービン制御油タンク液位高／低」警報が発報し、点検の結果、タービン中間塞止弁付近からタービン制御油の漏えいが認められたため、原子炉を手動停止した。 原因は、当該弁油圧制御装置のテスト電磁弁取付部の密封用Oリングが組立時の取付け不具合が起因となり損傷したため。	0－
96. 8. 24	東京電力(株) 柏崎刈羽発電所6号機	定格出力にて試運転中、原子炉水中のヨウ素濃度及び排ガス放射線モニタの指示に増加傾向が認められたため、原子炉を手動停止した。 原因は、燃料体1体から漏えいが発生したため。	0－
96. 8. 25	関西電力(株) 大飯発電所2号機	定格出力にて運転中、A-1次冷却材ポンプメーター下部軸受温度に上昇傾向が見られたため、原子炉を手動停止した。 原因は、当該軸受冷却水出口弁の中に異物が詰まったことによりモーター下部軸冷却水量が低下したため。	0－
96. 9. 16	関西電力(株) 大飯発電所4号機	定格出力にて運転中、「発電機内部故障」、「主変圧器内部故障地絡」警報が発信し、発電機及び原子炉が自動停止した。 原因は、発電機の製作段階において、固定子巻線相リードと接続している位相リングが十分に固定されていなかったため、運転中の振動等により素線が疲労破断し、その結果放電現象が生じ他相との短絡に至ったため。	0+

表1-2 1996年度原子力発電所におけるトラブルの概要(法律対象)(2/2)

発生年月日	発電所名	概要	尺度
96. 10. 6	日本原子力発電(株) 敦賀発電所1号機	定格出力にて運転中、原子炉冷却材再循環ポンプ(B)の軸封部に機能低下が認められたことから、当該軸封部を取り替えるため、原子炉を手動停止した。	0-
96. 10. 18	四国電力(株) 伊方発電所1号機	定期検査中、蒸気発生器伝熱管の渦電流探傷検査の結果、高温側の管板拡管部において有意な指示を発見。	0-
96. 12. 24	日本原子力発電(株) 敦賀発電所2号機	定格出力にて運転中、原子炉格納容器内の巡視点検中に、化学体積制御系統からホウ酸水の漏えいを発見。原子炉を手動停止した。 原因は、当該系統配管のエルボ部の製造段階において、管内表面に不純物が混入したため低融点金属による割れが発生し、その後亀裂が徐々に進展し、貫通に至り、漏えいしたため。	0-
97. 1. 28	東京電力(株) 福島第一発電所3号機	定格出力にて運転中、原子炉格納容器内空調機ドレン量に漸増傾向が認められたため原子炉を手動停止した。 原因は、格納容器内の主蒸気隔離弁のうち1弁の弁棒シール部のグランドパッキンを押さえる力が不十分であったことから、運転中にシール機能が低下し、蒸気が漏えいしたため。	0-
97. 2. 21	日本原子力発電(株) 敦賀発電所1号機	定格出力にて運転中、制御棒駆動水圧系配管の壁貫通部付近から駆動水の漏えいが認められたため、原子炉を手動停止した。 原因は、当該配管の施工時に、上流側溶接部が全周溶接ではなく4分の1周を残した溶接であったこと等により、当該上流溶接部の溶接終点部に応力が集中し、溶接部の材料硬化と重なって、施工段階で割れが発生、その後の配管内表面からの孔食の成長によりこの割れとつながったため。	0-
97. 3. 13	東京電力(株) 柏崎刈羽発電所6号機	定格出力にて調整運転中、原子炉残留熱除去系B系統の原子炉格納容器内の逆止弁の開閉試験実施後通常全開となるべきところ全開に至っていないことが確認されたため、原子炉を手動停止した。 原因は、前回の当該逆止弁の分解点検後にシャフトとアクチュエータの転結部の摩耗抵抗が増大し、逆止弁の復元力を上回ったため。	0-